

新たな農業経営を探る



キャベツ
甘みが増します
ーに並びます。
みてください。



キャベツの生育を確認する田中茂代表（豊老柳養老町田）

「GAP」積極的に取得

農事組合法人 三郷

[illegible]

化や若手人材の確保が期待される。農業者の積極的に取り組む。昨年、肥料散布用のドローンや直灌アシスト付きトラクター、田植機などを導入。田中さんは「ドローンは若い人より興味を持って取り組むことができる。作業も随分楽になった」と話す。今後とも積極的に労働環境の整備を行っていくと。

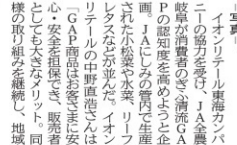


創立100周年記念で「祝い酒」

大垣養老高生が栽培
「JGAP米」使用
録作業などを行って認証
持に努めている。

スエーデンの「生徒たは記念事業」の一端として、JGAP認定証を取得した農地で栽培した酒米（ひばまれ）を使った酒の開発に取り組んだ。地元酒蔵、玉泉堂酒造、岡野高田が協力。ラベルには「JGAP商品を使用した」と表示す。JGAPのロゴマークをつけたのは全国で初めて。

完成品は、100周年の記念事業の一環として、この夏、事業家の協賛企業への送付が完了する。担当の岡本雷蔵氏は、数年後の同窓会で、開発に携わった生徒が酒を味わう機会を設けられた」と話している。



小松菜や水菜など
GAP商品が並ぶ

先月23日から26日の4日間、イオンモール大垣（大垣市外野）で、ぎふ清流GAP認証を取得した農産物を集めた特設コーナーが設置された写真。



の農産物の活性化に貢献して
いきたい」と話した。

J A全農岐阜は、今月23日と
24日、土岐プレミアムアウ
トレット（土岐市土岐津町）内
の特設会場で青果物や特産品
を販売する「直直フェア」を
開催予定。ぎふ清流GAP認
証商品も並び、

事故防止、ルール徹底

头领安全

農作業では、農薬や燃料など危険性の高い資材や特殊な機械を取り扱うため、重大な事故につながるリスクがあります。

うえて、安全で安心して労働者が働くための環境づくりは、最も大切なことです。そこで今回は「労働安全」をテーマに、ぎふ清流GAPの取り組みについて紹介します。

●危険な作業の把握
草刈りなどの危険作業

●安全な服装や防護設備の着用
安全に農作業を行うための服装や保護員の着用、保護手順の服を着、事故が発生するのを防ぐ、事故が起きた場合でも怪我を小さくできるようにする。

●法令に準守した機械など
の適正使用
農業用機械を使用する場

整備の実際、免許の取得、
 合法で定められた場所で
 必要な修繕の受領など
 を行い、正しい操作方を
 身につけることで、重大な
 事故を防ぐことができま
 す。

◆ ◆ ◆

「ぎふ清流GAP」では、労働者の安全を守るためのルールを定めて、その要領を評価します。

「GAP」に関する様子は、
 「ぎふ清流GAP推進セタ
 ー」(一般社団法人岐阜農
 畜産中心)、電話:058
 2461-1566。



トロンによる農業用は、初期に定着したのは、定着以外は離陸まで自動で待たれ、操縦技術がなくても作業が可能。『海洋市海津町』無線操縦式は、遠隔からトロンまで操作でき、安全性が高い。『下呂市』

先端技術を活用、効率化

自動運転アシスト機能付き汎用コンバインで米の収穫を行う。ほ場の外周のみ手動で操縦すれば、ほぼ自動で進む
—瑞穂市居合



クト」を事業の初年度である19年から活用し、耕起から収穫までの機器を一貫して導入。これまで事務などを担当していた女性従業員2人が中心となって機器を扱う。理事の江尾泰之さんは「2人が加わったことで任せられる作業が増え、とても助かっている」と導入に好感触を示し、さらなる生産性の向上を目指している。

スマート農業で農力向上

スマート農業は、ロボット技術や ICT（情報通信技術）などの先端技術を活用する新しい農業の形態で、高齢化による担い手不足の解消や作業の省力化、収益の向上などに期待されている。作業者の安全や効率性の高い農場経営など、GAPに重なる部分も多い。

県は2019年3月、スマート農業の技術を導入する生産者を増やし、生産性の高い産地づくりに目指す5年間の「県スマート農業推進計画」を全国で初めて策定。2020年6月には海田市海坪平原に推進センターを創設、21年には広島技術センター（広島市）、中山山農業研究所（飛騨市、中津川市）に加え計4カ所を情報発信の拠点として、研修の実施や機器の貸し出しなどを行い、県内外で推進を図る。

米や小麦、大豆、野菜などを栽培する県南営農組合（瑞穂市宮田）は、県内でいち早くスマート農業を取り入れた。国の委託を受けてスマート農業機器を導入し、実証に取り組む「スマート農業実証プロジェ

よき農家への
取り組みは、
持続可能な
食への道

幸せの
農きっぷ

GAP

GROWN IN JAPAN

volume. 5

私たちの食生活を支える農業。近年では食品の安全に加え、自然環境の保全や労働者の安全に配慮した農場経営を行うことが重要だとして、「GAP(ギャップ)」を意識する動きが高まっている。

「幸せの農さぶでは、昨年、新たに制定された県独自の制度「さぶ清流GAP」で第1号の認証を受けた団体を順に取り上げ、生産者の取り組みについて探って見た。最後に紹介するのは、養老郡養老町で積極的な経営改善を進める農事組合法人三郷。また、農業の新しい形として期待されるスマート農業の取り組みについても取り上げる。



GAP「Good Agricultural Practice」の頭文字で、「農業生産工程管理」と訳される。農業の生産工程において食品の安全や自然環境の保全、生産者の労働安全や人権の保護に配慮し、農産物の供給を持続可能にするための取り組み。グローバルGAPやGAP、ASIAGAPのほか、共通のガイドラインに沿って各都道府県が独自に策定したGAP認証制度などがある。

すく、さらに上級グレードのGAPを目指すことができたとして、県が独自に策定したGAP制度。昨年11月に制定し、5月に行われた第1回証書交付式で8団体が認証を受けた。ロゴマークは認証された農産物に使用することが認められる。

無断複製・転載を禁じます